

山本唯三郎

—三十六歌仙をバラ売りした虎大尽—

本井 康博

(神学部教授)

●兄弟星

山本唯三郎を「全国区」にしたのは、NHKである。「絵巻切斷——秘宝三十



山本唯三郎

六歌仙の流転」(1983年11月3日)が放映される前は、せいせい『財界物語傑物伝』(下巻603頁、実業之世界社、1936年)が、「実業界に於ける横紙破りの快男児であり、彗星的存在」と取り上げたくらいであった。

この「彗星」には6歳違いの兄、青木要吉がいた。ふたりとも初期の同志社を経て、実業界で活躍したが、兄は地味な「恒星」に徹した。蘇峰・蘆花同様、対照的な兄弟であった。ある友人は、最初は「余りの性格の相違から真の兄弟とは思はなかった。沈着と粗放、素朴と豪華、

質素と不羈、天下に是れ程まで似付かぬ兄弟は、蓋し尠ない」と述懐する(「青木要吉追憶集」416頁、青木正雄刊、1940年)。

●船成金

弟に関しては、吉岡三平「山本唯三郎」一〇一三(『産経新聞』岡山版、1962年12月21日)1963年1月17日)が、兄弟のことは鑄木路易(「青木要吉、山本唯三郎——同志社出身の異色の兄弟」(『同志社談叢』93、2002年)が詳し

い。それらによれば、ふたりは田鶴藩

(岡山県)の藩士、坂育正雪の二男、三男で、幼児の折、共に養子に出された。青木は岡山教会牧師の金森通倫に連れられて同志社に入学した。卒業後、同志社仙台分校の東華学校で教鞭を執ったが、廃校されたので、市原盛宏(同校副校長)の後を追うようにイェール大学で経済学を学んだ。

青木は仙台赴任後、毎月3円援助して弟を同志社に送った。が、留学後はそれが果たせず、山本は中退に追い込まれた。さいわい、札幌農学校で新渡戸稲造などの指導を受ける道が拓かれた。ただ、牛乳配達などに頼る苦学は続いた。

同校卒業後は、新渡戸の後援で北海道の開拓事業に従事するが、大陸雄飛の夢を追い、天津に拠点を置く日中貿易会社、松昌洋行に転じた。同志社政法学校教頭から日銀に転進していた市原と、市原を高く買う渋沢栄一の口利きが効いた。山本は材木、石炭に加えて船舶にも手を伸ばし、社運の隆盛をもたらした。かつての苦学生はついに大富豪にまで上りつめた。世に言う「船成金」である。

●虎大尽

山本は、ついで政界進出を図り、1916年に岡山県から政友会推薦で代議士に立候補した。妻の父、石黒瀧一郎が政友会代議士(岡山県選出)を3期、務め上げ、山本宅で引退生活を送っていたことも立候補決断の一因であったはずである。

結果は落選であった。捲土重来を期して、5年後にも再挑戦してみたものの、結果は同じであった。その間の1916年には、気晴らしを兼ねて妻子と中国旅行に出かけ、孫文にも面会している(山本唯三郎『支那漫遊五十日』57頁、神田文吉刊、1917年)。さらに翌年には、朝鮮(感興方面)に繰り出し、大規模な虎狩りを敢行している。

成金趣味芬々たるこの一大イベントが、「虎大尽」の異名を生んだ。虎狩は、最初の選挙でトラ(山谷虎三)に負けた腹いせ、とさえ取り沙汰された。鳴り物入りの大捕り物の消息は、帰国後、吉浦龍太郎により『征虎記』(1918年)

としてまとめられた。

それによれば、「征虎軍」の軍勢は8班に分かれ、現地で雇った射撃の名手を含めて総じて約150人。同行取材した新聞記者だけでも19人になる。「軍歌」も作詞され、「加藤清正昔の事よ、今じ



朝鮮虎の剥製(同志社高等学校醇化館)



虎肉がメインディッシュの獲物試食会（帝国ホテル）

で4千万円と噂された山本にとって、三十五、六万は安い買い物であったのか（同前127頁）。ところが、大戦の終結で一挙に「バブル」崩壊である。松昌洋行の経営も行き詰まり、自宅の「池上御殿」（4万7千坪）はもちろん、三十六歌仙も売却の憂き目にあつた。だが、絵巻の買い手は不況の中、容易には見つからない。そこで三井物産創設者で美術品収集家としても知られた益田孝（鈍翁）が苦肉の策を立てた。なんと「バラ売り」である。

1919年12月20日、品川の益田邸で「虎大尽」の奇行と並ぶ、「船成金」のいまひとつの破天荒は、「佐竹本三十六歌仙絵巻」の買い付けと売り立てである。この絵巻は王朝歌仙絵巻の最高傑作とも言われ、鎌倉時代の画家、藤原信実の作である。秋田藩主・佐竹家が永年、秘匿した「幻の絵巻」であつた。

● 同志社に残る痕跡

すべてが「一朝の夢」と消え果てた「没落成金の典型」——これが山本の定評である（『財界物語傑物伝』下巻603頁）。が、夢の痕跡は、同志社でも消えてはいない。

ひとつは、彼が寄贈した新島襄の胸像（田中親光作）である。1917年1月13日、神学館（クラーク記念館）2階で新島八重が除幕をした（『同志社時報』1917年2月1日）。母校と新島に対する山本の篤い想いが窺われる。

新島と言えば、新島悲願の同志社大学



朝鮮に繰り出した「征虎軍」。右端が山本唯三郎

や山本征虎軍、虎来い、虎来い」と勇ましい。約1カ月間の「行軍」で、2頭の虎を始め、豹や猪、山羊など30頭の獲物を仕留めた。

帰国前には朝鮮ホテルに京城の名士120余名を招待して、帰国後は東京の帝国ホテル（12月20日）で、「獲物試食会」を大々的に開催した。東京の場合、「悉く土産の野獣の調理」で、200人を越える「来賓一同」は是れは是れは舌鼓に非常の好評であつた。献立の目玉は、もちろん「威南虎冷肉 煮込み、トマトケチャップ、マリネ」であつた。

● 三十六歌仙

「虎大尽」の奇行と並ぶ、「船成金」のいまひとつの破天荒は、「佐竹本三十六歌仙絵巻」の買い付けと売り立てである。この絵巻は王朝歌仙絵巻の最高傑作とも言われ、鎌倉時代の画家、藤原信実の作である。秋田藩主・佐竹家が永年、秘匿した「幻の絵巻」であつた。

そのため1917年、同家がこれを手放した時、「入札史上空前の高値」を呼んだ。2巻で35万3千円である。あまりの額に単独落札は無理だつた。結局、東京、大阪、京都などの大手道具商が連合で、しかも9人がかりでやつと落札した（高島光雪他著『絵巻切断——秘宝三十六歌仙の流転』24〜25頁、美術公論社、1984年）。

問題は買い手である。「虎大尽」の評判を聞いた道具商が、築地の料亭で遊興中の山本の許へ持ち込んだところ、一瞥するなり「よし、買う」と即答したという。時は第1次世界大戦の真っ只中、「船成金」の絶頂期であつた。預金だけ

創設に際して、青木は設立委員の1人として、そして山本は村井貞之助の1万円に次ぐ5千円の寄附をして協力をした。さらに新島家の跡取りで同志社の先輩、

新島公義を山本は一時、松昌洋行に迎えた。公義は「朝鮮の虎狩りに行って行って、虎の血を飲んで来た」と息子に自慢したという（河野仁昭「新島得夫氏（社友）に聞く」69頁、『同志社時報』75、1983年）。

『征虎記』表紙裏に印刷された参加者署名にも公義の名が出る。報道によれば、公義は松昌洋行庶務課長として、虎狩りでは八面六臂の活躍をしている。

新島胸像に次ぐのは、啓明館である。先の除幕式の折、山本は新図書館建築費として6万円を寄贈した（同前）。工事が嵩むや、さらに2万円を追加した（同前、1918年7月1日）。こうして1920年に竣工を見たのが啓明館（図書館本館）である。大学令により大学に昇格した同志社のいわばシンボルとなった。

山本は図書館寄贈の由来をこう述懐する。「幼児の「時に自分が嘗めた」辛酸は、忘れようにも忘れることはできない。そこで、このように貧しく学校に学ぶことのできない者は、まだまだ世間には少なくないと思う。けれども、教育はひとり学校だけにまつべきものではない、と私は信じている。微力ながらこの図書館を寄附したゆえにも、この点にあるのである」（山本唯三郎）8、1963年1月8日）。山本が郷里の岡山市に市立図書館の建築費を寄附したのも、同じ想いからであろう。

3つ目は、虎の標本（剥製）である。2頭は皇太子と母校にそれぞれ寄贈された。今では絶滅した朝鮮虎の剥製は珍しく、これがかつてNHKが全国放映した「送り状」（足利武千代宛、1920年10月19日付）に詳しい。同書は、「朝鮮虎狩隊」の新聞記事スクラップ（15帖）や関連写真（説明は公義）などと共に、大学の総合情報センター貴重室に宝蔵されている。



山本唯三郎が建築費8万円を寄附した啓明館

●同志社時代の精神的遺産

さて、色街で豪遊した武勇伝に事欠かない山本であるが、青年時代は篤信のキリスト教徒であった。受洗は大阪教会（宮川経輝牧師）であった。日給15銭の印刷工として働きながら同志社系の泰西（たいせい）学館夜学に通っていた頃であろう。山本は同志社入学後、札幌組合教会に転出するまで、同志社教会に籍（1891年5月31日〜1893年12月16日）を置いた（坂本武人『同志社教会員歴史名簿』46

頁、1996年）。
在学中の山本の意気軒昂振りは、全国紙の『基督教新聞』（1890年10月17日）への投稿、「基督教徒不振の原因」に窺われる。信徒の不振は「信仰の確固ならざる故」と「愛心の乏しき故」だという。これ以前にも同紙で「日本基督教会の腐敗を改革し、其の面目を一新する所の人物の出でんことを促した」という（同前）。

校内誌『同志社文学雑誌』第37号（20〜22頁、1890年11月30日）にも「同志社学生ノ事業」を寄稿し（ちなみに号

新島襄の胸像（ハリス理化学館2階）



は「黙雷」、社会的な諸種の期待に対して学生は責任を負うべし、と力説した。後年、彼が図書館のほかにも郷里に「山本養蚕学校」を創立したり、山陽女学校校舎建築費を寄附するのも、この延長線上である（『日本人名大事典』403頁）。
海外への目も早くから開かれた。とりわけ中国

への関心が高く、著作も3冊を数える。『支那の将来』（実業之日本社、1912年）、『支那漫遊五十日』（前出）、ウィックサリング（G. Vissering）著・山本唯三郎訳『支那幣制改革論』（松昌洋行、1913年。原著は *On Chinese Currency, 1897*）である。
単なる「成金中の成金」（小汀利得『第一次大戦ブームと船成金の狂態』304ページ、『別冊中央公論（経営問題）』1965年秋季特大号）ではなく、どこか文人肌の企業家、それもフィランソロピストであった。

山本唯三郎

（やまもと・たださぶろう、
1873.11.8 ~ 1927.4.17）

岡山県久米郡田鶴で出生し、山本竹次郎の養子となる。泰西学館（大阪）、同志社、札幌農学校で苦学。北海道開拓事業に従事した後、松昌洋行に入社。社長として巨富を得、同志社を始め、文化・教育事業にも巨額の寄附を惜しまなかった。